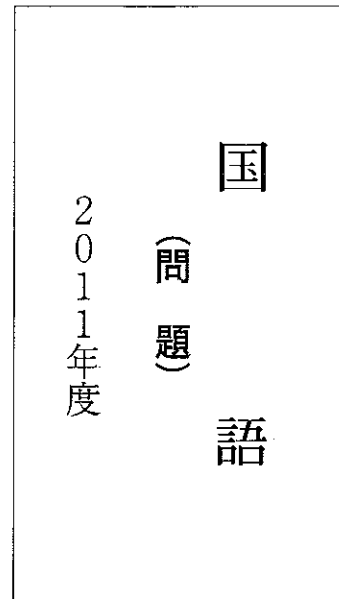




〈2011 H23051119〉

注意事項

- 1 問題冊子は、試験開始の指示があるまで開かないこと。
- 2 問題は2～11ページに記載されている。試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督員に知らせること。
- 3 解答はすべて解答用紙の所定欄にHBの黒鉛筆またはHBのシャープペンシルでマークすること。
- 4 試験開始後、解答用紙の所定欄に氏名を記入すること。
- 5 マークははつきり記入すること。また、訂正する場合は、消しゴムで丁寧に、消し残しがないようによく消すこと（砂消しゴムは使用しないこと）。

マークする時	● 良い	○ 悪い	○ 悪い
マークを消す時	○ 良い	○ 悪い	○ 悪い

- 6 いかなる場合でも、解答用紙は必ず提出すること。
- 7 試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。

(一) 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

私たちは、自分や他人が生きているとはどういうことを知っている。それは必ずしも、私たちが「生きているとはどういうことか」を説明できるとか、まして「生命とは何か」といった問いに言葉で答えることができるということではない。そんな言葉を知らなくても、子どもが昆虫採集や魚釣りに夢中になれるのは——そうした遊びの機会は急速に失われつつあるけれど——生きているものとそうでないものとを直観的に区別しているからだ。

たぶん子どもたちにとって最初の手がかりは、生き物は勝手に動くということだろう。だがそれがすべてではない。かたちも重要だ。生き物は生き物らしいかたちをしている。それに加えて、身近な人間たちや、犬や猫に触れた手に感じられる独特の柔らかさや暖かな鼓動から、子どもは何かが生きているとはどういうことを学んでゆく。まだ「生命」とか「いのち」とかいった抽象観念はもっていないくとも、いやむしろそれゆえにこそ、子どもは何かが生きているのかを知っているのだ。

A

ここで注目すべきは、応答するはずのないもの、すなわち生命をもたない相手に対しても、子どもはためらうことなく呼びかけるということだ。典型的なのはクマのぬいぐるみや着せ替え人形に対する態度である。子どもがいつも腕に抱えているクマのぬいぐるみに「タロちゃん、お散歩にいきましょう」等々と話しかけると、その呼びかける声の消失点である「タロちゃん」は、単なる **B** 事物ではなく、顔をもった人称的存在者——そのような存在者をここでは「誰か」と表記しよう——である。そしてそのことは、子どもにとって、タロちゃんが生きているということからまだ区別されてはいない。私たちは大人になる過程のどこかで、ぬいぐるみは生きている——したがって、生きているものと同じように取り扱う必要はない——ということをおぼえるのである。

ただし厳密には、「生きている」という表現のこの使い方は不正確である。何かが生きていないという言い方を私たちがするのは、かつては生きていたものが死んでしまつて、もはや生きているのではない、という場合がほとんどではないだろうか。はじめから生きているものについては、むしろ「生き物（生物）」ではない「や」「生命（いのち）」をもたない」というように、「生き物」「生命」という名詞によって述語づけることがふつうなのではないだろうか。

反対に、何かが生きているという言い方をする場合、そのときの主題は何かが生きているのか無生物であるかではなく、生物であることはすでにわかっている何か（ある時点で）生きているのか死んでいるのかという対比であることが多くように思われる。「鼠は生きているが、消しゴムは生きている」というよりも、「鼠は生き物だが、消しゴムは生き物ではない」という方が自然な言い回しであろう。

このように、大人たちにとっては、何か「生き物である」「生物である」ということがまずあつて、その次にその何か「生きている」のか、それとも死んでいるのかが問題となるのである。子どもの世界観と比べると、このことがもつ意味は両義的である。言葉よりも前に子どもが理解する感覚を表すのに適切なものは、すでにみたように、「生きている」という言い回しの方だ。「生き物」や「生物」といった名詞的ハ握^a、ましてや「生命」や「いのち」といった抽象観念が子どもに到来するのは、ずっと後のことである。しかしそうした観念に精神を侵されてしまった大人はこの順序を転倒させ、まず「生物／無生物」という軸で世界を腑分けした後で、さらに生物についてだけ「生きている／死んでいる」という弁別^bの述語を与えるのだ。

けれども、そのように転倒したやり方であれ、私たちが「生き物である／ない」という表現と「生きている／死んでいる」という表現を微妙に使い分けられるという事実には、子どものときにはじめて何かが生きているということの意味を体得した、その原初的な感覚の残響を聞き取ることができるよう思われる。それと併せて、子どもにとって生きているものとは **C** ではなく **D** なのだったことを思い起こしてみよう。私たち大人もまた、自分にとって大切な人の生死の分かれ目に遭^bグウするときには、そのような感覚を思い出すのではないか？

たとえば、自分の愛する人が脳死状態に陥ったとき、その傍らに立つ私たちは、たとえ脳死状態が人の死であると考えていたとしても、その人に何ごとかを呼びかけるだろう（「お母さん」「太郎さん」「辛かっただろうね」「なんで死ん

じやったの」等々)。それは相手をいまだ単なる物体ではなく「誰か」——すなわち、世界の開けの原点であると同時に、私からみれば世界の消失点でもあるような他者——であると認めることである。いや、脳死者ではなく、いかなる意味でもすでに死んだ他者について考えてみてもよい。死んだ直後の「死者」は、文字通り「死んだ者」であって、いまだ「死んだ物」すなわちモノとしての「死体」ではない。

右のような場景に示唆されているように、私たちにとって意味のある「他者」の本質とは「生命」などではなく、それが「E」であるということなのである。言い換えれば、「物」ではなく「者」であるか否かが問題なのだ。

生命科学や生物学の土台には、生きているという事態を「生命」という名詞で表される観念へと抽象する、「生命のフエティシズム」がある。そのような知の枠組みの内部で見出される「生命の本質」なるもの——「自己複製能力」や「動的平衡」といった観念、あるいは「生命とは遺伝子である」というたぐいの言い回し——は、かつて私たちが感受した「誰々が生きている」という原初的な事実からあまりにも遠く隔たっている。果たしてそれは、私たちが何かに触れて感じる「生きている」という感触と、本当に同じものを指しているのだろうか。

誤解してほしくないのだが、私は科学としての生物学や生命科学を否定しているのではない。分子遺伝学が日々更新しつづけてくれているDNA-RNAワールドの目眩く精緻なメカニズムや、進化生物学が解き明かす自然のダイナミクスは知的興奮をかきたててくれる。むしろ「生命」は生命科学の特権的なフィールドであってよい。そのことを認めたいので、私がいいたいのは、私たちが人の生死をめぐって倫理を問う場面では、「生命」という観念は本質的な意義をもたないということだ。倫理の問いは、「生命」の問いではない。それは「誰かが生きている」、「誰がいる」という事実をめぐる問いでなければならない。

たとえ生命があっても、それが私たちにとって呼びかけの対象たりうる「誰か」でないのなら、そもそも倫理の問いが立ち上ることさえないだろう。問題をはつきりさせるために、極端な事例をとりあげてみよう。「生命」という概念の適用限界にある存在者として、コンピュータ上を走る各種の「人工生命」がある。「生命」である以上、コンピュータの電源を切ることは、それを「殺す」ことであるはずだ。だがおそらく、人工生命を消滅させることをめぐる倫理的是非を真剣に考えている人はまずいないだろう。「人工生命」は、ある抽象的な意味では「F」ではあるのかもしれないが、人間にとっての生きている「G」からはかけ離れた存在者——とさえいえないような「H」——ではないからだ。

他方、鉄腕アトムやドラえもんやロボコンのように人間と言葉を交わし、人間とともに生活するロボットが実際にいたとしたら、たとえかれらが「生命」をもってはいないことを頭では理解していたとしても、私たちはかれらをむやみに破壊することはできなくなる。たとえば、浦沢直樹の漫画「ブルートウ」で主人公のアトムが敵によって機能停止されたとき、読者はアトムが「死んだ」あるいは「殺された」と感じずにはいられない。しかしアトムの死を悲しむのと同じ人が「アトムには生命があったのか」と問われれば、たぶん口ごもるだろう。「そんなことはどうでもいい」と怒り出すかもしれない。ここには何も矛盾はない。アトムに生命があるうがなろうが、そんな抽象概念にはるかに先立つ次元で、アトムは確かに私たちのあいだで生きていたのであり、したがって死ぬこともできるのである。それはすなわち、アトムが私たちにとって「I」的な「誰か」であったということにはかならない。

(加藤秀一の文章による)

問一 傍線部 a・b にあたる漢字を含むものを、それぞれ次のイ・ホの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

傍線部 a	イ	大雑バ	ロ	ハ	気	ハ	遣	ニ	論バ	ホ	老バ	心
傍線部 b	イ	辺グウ	ロ	配グウ者	ハ	グウ話	ニ	待グウ	ホ	グウ司		

問二 空欄

A

には、次の i ～ iv の文を並べ替えた文章が入る。正しい順番を、イ ～ 二の中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

i この世界に生まれ落ちた子どもは、まず親や周囲の大人たちからの呼びかけに応え、逆に呼びかけることを身につけてゆく。

ii 言語がコミュニケーションの道具として進化してきたのだとすれば、それは当然のことだろう。

iii 子どもにとって、生きているものとは、それに対して呼びかけうる、あるいは呼びかけてしまう対象のことだ。

iv そしてそれは同時に、誰かに呼びかけることを学ぶということでもある。

イ i ・ iii ii ・ iv

ロ ii ・ iii iv ・ i

ハ iii ii ・ iv i

二 iv ii ・ iii i

問三

B

に入る最も適切な語句を、次のイ ～ ホの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ のつそりとした ロ どつしりとした ハ あつさりとした

二 ひつそりとした ホ のつべりとした

問四

傍線部 1 「子どもにとって、タロちゃんが生きているということからまだ区別されてはいない。」とあるが、これはどういう意味か。その説明として最も適切なものを、次のイ ～ ホの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ 子どもにとってタロちゃんは、犬や猫と同様に生きていて、呼びかけうる存在だということ。

ロ 子どもでもタロちゃんが生命をもたないことは知っているが、つい呼びかけてしまうということ。

ハ 同じ生きている存在でも、犬や猫とタロちゃんとは、子どもでも自然に区別しているということ。

二 子どもにとってタロちゃんは生きているから、犬や猫と区別して扱う大人の態度が理解できないということ。

ホ 子どもにとって、タロちゃんが生きているとか生きていないとかいう区別は、呼びかけの対象としては無関係だということ。

問五

傍線部 2 「このことがもつ意味は両義的である。」とあるが、これはどういうことか。その説明として最も適切なものを、次のイ ～ ホの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ 「生きている」ことに关する大人の理解は、まだ未熟な子どもの世界観とは正反对だが、大人も昔は子供だったことを思い出せば、子どもの理解の仕方に共感できる点もあるということ。

ロ 「生きている」ことに关する大人の理解は、「生物／無生物」で分類したのち生物についてだけ「生きている／死んでいる」と判断する流れだが、脳死の人を前にした時の行動は、往々にしてその逆の流れになるということ。

ハ 「生きている」ことに关する大人の理解は転倒して、名詞表現から動詞表現のとらえ方へと進むが、動詞と名詞の表現を微妙に使い分けられる点では、子どもと共通の純粋な感覚をいまだ持ち合わせているということ。

二 「生きている」ことに关する大人の理解は子どもとは違っていて、もはやぬいぐるみを生き物と取り違えたりはしないものだが、生命の大切さを子どもに教えるために、故意に無生物を生物扱いして見せることもあるということ。

ホ 「生きている」ことに关する大人の理解は、対象が生物であるか否かという理性的な判断に基づくが、子どもの理解はその逆で、生物無生物にかかわらず、対象が自分にとって誰かであれば仲間とみなすのが普通感覚だということ。

問六

空欄

C

H

には、「何か」「誰か」「生命」のいずれかが入る。それぞれに入る語として最も適切なものを、次のイ〜ハの中から一つずつ選び、その解答欄にマークせよ。

イ 生命 ロ 何か ハ 誰か

問七

傍線部3「倫理の問いは、「生命」の問いではない。」とあるが、ここで著者が言いたいことはどういうことか。その説明として最も適切なものを、次のイ〜ホの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ 人の生死をめぐる倫理への問いは、観念的な「生命」を実体的なものと前提したうえで、その質や価値について論じるべき性質のものである。

ロ 人の生死をめぐる倫理への問いは、「生命の本質」を探る「生命のフetišズム」を土台に、新たな生命科学や生物学の知見を取り入れて論じられる必要がある。

ハ 人の生死をめぐる倫理への問いは、例えば、安楽死の是非に見られるような人間の尊厳にかかわる問題であり、個々の「生命」について論じるレベルの問題ではない。

ニ 人の生死をめぐる倫理への問いは、抽象的な「生命」ではなく、「生きている」「他者が「誰か」であるような個々具体的な関係性に基づいて論じられなければならない。

ホ 人の生死をめぐる倫理への問いは、人の生死をめぐる我々がいかなる態度を取るべきかを方向づけるものであり、「生命倫理」の枠組みを早急に構築することが望ましい。

問八

空欄

I

I

に入る最も適切な語を、次のイ〜ホの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ 原初 ロ 人称 ハ 観念 ニ 典型 ホ 直観

問九

本文の趣旨と合致しないものを、次のイ〜ホの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ 私たちは何かを、それに向かって呼びかけることが無意味ではないような対象、すなわち「誰か」として見出すことにおいて、「生きている」という動詞の使い方を学ぶ。

ロ 人工生命を殺すことにはためらい一つ持たない人々が、人間と言葉を交わすロボットが死ねば悲しむというのは、「生命」とは別の次元で「生きている」ことを実感しているからである。

ハ 「生命」という名詞で表される抽象観念こそが生き物の本質であり、私たちが何かに触れて感じる「生きている」という動詞は単なる現象形態にすぎない、という見方には賛同できない。

ニ すでに大人である私たちは、何かが「生きている」か否かという知識を無視することはできないため、ぬいぐるみはもちろんのこと、飼い犬や死んだ人に語りかけるような行動は生命のフetišズムとみなされる。

ホ 「鼠は生き物だが、消しゴムは生き物ではない」という前提のもとで、さらにその生物である鼠が「生きている」のか「死んでいる」のかと判断するのであって、無生物に対していきなり「消しゴムは生きている」と表現する大人はあまりいないだろう。

(二) 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

かつての住空間には、境界があつた。ローマ帝国の場合は、境界神テルミヌスが、ボーダーを守っていた。領土を確定し、それを外部に知らしめるために、それぞれの文化は独自の指標をつくってきた。よく知られるように、ローマ人の帝国を支えていたのは、高度に発達した道路網である。土木と治水の技術がいかに優れていたかは、アヴィニヨン近くに残る壮大な水道橋や、さらに遠く離れたピレネー山脈に残る鋪石からも偲ばれる。その道が尽きるところ、それがテルミヌスの場所だつた。今日、わたしたちはテルミヌスという言葉で、「道」の尽きるところとして使っている。たとえば電車やバスのターミナルである。ひとつのラインの終わる点、つまり「終点」としてのターミナルに、もはや今日の旅人は、神を見ることはないかもしれない。それでもこの「終点」は、かつて境界神が守らなければならなかつた。

【Ⅰ】

大都市の複数の路線が乗り入れる駅には、微かにではあるが、そのことが感じられる。ローマのテルミニ駅やパリの北駅周辺の猥雑とした雰囲気である。東京では上野駅がそうだろうか。大都市の終着駅には、一種独特の群集がいる。かつて詩人がうたったように、その群集からは故郷の訛りが聞こえることもあるし、ローマのテルミニのように、スリがたくさんいるかもしれない。みやげ物とお守りとお弁当がひしめきあい、ヨーロッパの場合には各国語の新聞雑誌が売られ、時刻表を見上げれば異国の町の名が並んでいる。ガイドブックを開くと、たいいてい安売りの店は終着駅の近くにあり、バーやキャバレーも近くにある。安くて早い立ち食いのお店があるのもそこだが、夜の一人歩きに注意しなければならぬようなところも少なくない。【Ⅱ】

都市のターミナルに他の地区とは違った、華やかと危険な雰囲気が同居しているのは、そこが「異なるもの」との接点だからに他ならない。異国からの人やモノが到着するところ、「外部」が日常のなかにカン入してくるところである。ローマにあつては、異なる言葉を話す「野蠻」人が住む空間との接点だろう。都市の内部で使われている言葉とは、異なる言葉を使う人々、異なるコードを持つ人々が降り立つところだから、それ相應の態度を示さなければならぬ場所なのだ。境界の内側の人間にとっては好奇心と恐怖心が入り混じるところであり、そして本当の旅が始まるところである。テルミヌスという神が置かれるのは、単に道が尽きるからではない。テルミヌスのものが異界と触れる場所、未知が始まるところなのだ。【Ⅲ】

地球がどんなに小さくなつても、未知は存在する。たとえ原始の森の奥にまで高速道路が開通し、成層圏を飛ぶ飛行機が大陸間を数時間で結ぶようになろうとも、人類はこの地球の秘密のすべてを知ることにはないだろう。そのような世界でテルミヌスは、かつてのような「境界の神」だろうか。【Ⅳ】

わたしが子供のころ、電話はダイヤルがついた装置だつた。装置と呼ぶに相応しく、それは黒くて目覚まし時計よりも大きな音がするものだった。黒い電話は、しばしば玄関口に置かれていた。なぜなのか、本当の理由は分からないが、電話はやはり外からやってくるものだったのだろう。来客が最初に入ってくるのが玄関であるように、電話の声もやはり玄関から入ってくるように感じていたのかもしれない。電話をかけるときも、番号をひとつひとつ確かめるように人さし指で回したものだ。まるで見えない玄関に向かって「開けてください」とおまじないをかけているようだった。

そうした光景は、世界中どこへいっても遠い過去のものになった。今日ターミナルと呼ばれる場所、それは端末あるいは末端にある、非常に小さな「点」である。かつての道はケーブルであり、あるいは光ファイバーであり、そして人工衛星が仲介する通信設備である。

2 的には、「道無き道」である。無線と呼ばれるのは、宇宙空間を経由して大気中をあらゆる方向に進む、見えない波のことである。この見えない波が、見えるようになる地点、聞こえない波が聞こえるようになる地点が、「端末」と呼ばれる新しいターミナルである。【Ⅴ】

前世紀末にインターネットが 3 的に普及するにあたって、合衆国は「情報スーパーハイウェイ構想」を打ち出したが、考えてみればそのときはまだローマ帝国の道路網のイメージは生きていたのだろう。そうであるから「スーパー高速道路」とは名づけなかったに違いない。だがもはや道はない。空間のあらゆる場を通じて、電波は届く。端末に声、文字、絵が届く。しかもかつてのように、家という空間に届くのではなく、人間に届く。移動体通信は、住空間から個人へと端末の先を変える。いまやすべての人間が端末になろうとしているのである。

目に見えない変化、それは広い意味での境界の変容としてとらえることができるだろう。かつて郊外という空間が都市の境界を打ち消して、アメーバ状にひろがってゆくメガロポリスを生みだしていったのとは異なり、現在の技術革新

がもたらす変化は、はっきりとは目には見えない。なぜなら痕跡を残さないからだ。わたしたちが住もうとしているのは鑿の跡に残らない、触れることも感じることもできない壁でできた空間である。自分自身がターミナルになつてしまつた人間にとつて、外部に境界は存在しない。いつでも、どこにいても、そこが都市であり、そこが住む場所であり、そこが終点である。

駅の神さまは、そんなわたしたちをどう見ているだろうか。果たしてテルミヌスはいまでもどこかで見守つてくれているのだろうか。

(港千尋の文章による)

問十 傍線部 a b にあたる漢字を含むものを、それぞれ次のイホの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

傍線部 a イ 乾電池 □ 血糖チ ハ 自チ体 ニ チ下鉄 ホ チ識人
傍線部 b イ 往カン □ 基カン ハ 血カン ニ 循カン ホ 突カン

問十一 次の一文は、本文中の「I」「V」のいずれかに入るものである。最も適切な箇所を次のイホの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

つまりターミナル駅そのものが、神さまなのである。

イ I □ II ハ III ニ IV ホ V

問十二 傍線部 1「かつて詩人がうたつたように、その群集からは故郷の訛りが聞こえることもあるし」というのは、石川啄木の短歌「ふるさとの訛なつかし停車場の人ごみの中にそれを聴きにゆく」(原文は三行書き)を指している。これについて次の問いに答えよ。

(1) この短歌の説明として最も適切なものを、次のイホの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

- イ 上京した同郷人を停車場に迎えに来て、久しぶりになつかしい故郷の訛りを聞ける嬉しさを味わっている歌。
□ 生活に倦み疲れた都会の停車場で、せめて故郷の訛りに触れたいという切迫した郷愁にかられている歌。
ハ ようやく帰りついた故郷の停車場で、行き交う人々の昔ながらの訛りを耳にして喜びをかみしめている歌。
ニ 故郷に向かう汽車のなかで、まもなく訛りの飛び交う停車場に降り立つことができるのを心待ちにしている歌。
ホ 異郷の駅に着き、聞こえるはずもない故郷の訛りが聞こえたように思えて望郷の念にひたっている歌。

(2) この短歌が収録された石川啄木の歌集を、次のイホの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ 『二握の砂』 □ 『赤光』 ハ 『旅人かへらず』 ニ 『道程』 ホ 『みだれ髪』

問十三 空欄 2

3 に入る最も適切な語を、それぞれ次のイホの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。なお、同じものをくりかえして使つてはいけない。

イ 画一 □ 究極 ハ 相対 ニ 破壊 ホ 爆発 ヘ 比喩 ト 理想

問十四 傍線部 4 5 6 7 のなかに、原文と異なる語句が入っているために、意味が通じない箇所がある。どのよう

に訂正すれば原文通りになるか、最も適切なものを、次のイホの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ 傍線部 4 の「そうであるから」を「そうでなければ」に訂正する。

□ 傍線部 5 の「だが」を「だから」に訂正する。

ハ 傍線部 6 の「しかも」を「しかし」に訂正する。

ニ 傍線部 7 の「いまや」を「いまだに」に訂正する。

問十五 傍線部8「自分自身がターミナルになってしまった人間にとって、外部に境界は存在しない。」の意味として最も適切なものを、次のイ〜ホの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ 個人が情報の受発信装置になることで、外部ではなく人間の内部に受信者と発信者の境界が生まれることになった。

ロ 人間がきわめて小さな「点」のような存在になって、外部への道を見失い境界の内部でしか生きられなくなった。

ハ 時と場所にかかわらず常に何かと繋がっている状態で、自分と外部とを隔てる壁の存在が見えなくなった。

ニ 誰でも情報端末を持ち歩くことができるため、未知の不安を感じることなしに外部に越境することが可能になった。

ホ 自分自身があらゆる情報の最終的な到達点となった結果、新しく外部に発信できるものが何もなくなった。

問十六 本文の趣旨と合致するものを、次のイ〜ハの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ ターミナルの語源ともなっているローマ帝国の境界神テルミヌスは、ヨーロッパでは現在でも大都市のターミナル駅の神さまとして、異国との間を行き交う旅人の姿を見守り続けている。

ロ かつて玄関口に置かれていた電話のように、住空間に属していた端末が個人の所有物になると、外界の侵入から個人を護る防壁であった家の役割も、大きな変質を余儀なくされる。

ハ 現在の技術革新はかつてのようにはっきりとした形となって現れないので、わたしたちは見えない変化にとまどい、ともすると外部との接触を恐れて自分の内側に閉じこもりがちになる。

ニ 大都市のターミナルに独特の雰囲気が残っているのは、異郷の人々が行き交うからというだけでなく、今日でも人が日常から異界に踏みだす場所としての意味を失っていないからである。

ホ 移動体通信の急速な発達によって、人々はかならずしも都市部に居住する必要がなくなり、これまで高速道路や交通網によって拡充してきた都市の機能はむしろ縮小する傾向にある。

ヘ 目に見える壁によって外部と隔てられていた都市は、郊外という空間がアメーバ状に広がるメガロポリスへと姿をかえたが、その変化ははっきりとは目に見えなかった。

問十七 この文章のタイトルとして最も適切なものを、次のイ〜ホの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ テルミヌスの越境

ロ テルミヌスの痕跡

ハ テルミヌスの再生

ニ テルミヌスの消滅

ホ テルミヌスの変身

(三) 次の文章は女流日記『とはすがたり』の一節で、作者が後深草院のもとを退く場面である。これを読んで、あとの問いに答えよ。

大人しき女房たちなども訪ひ仰せらるれども、知りたりけることがなまままには、ただ泣くよりほかのことなくて、暮れゆけば、御所さまの御気色なればこそかかるために、またさし出でむも恐れある心地すれども、今より後はいかにしてかと思へば、今は限りの御面影も今一度見まゐらせむと思ふばかりに、迷ひ出でて御前に参りたれば、御前には公卿二、三人ばかりして、何となき御物語のほどなり。

練薄物の生絹の衣に、薄に葛を青き糸にて縫物にしたるに、赤色の唐衣を着たりしに、きと御覧じおこせて、「今宵はいかに御出でか」と仰せ言あり。何と申すべき言の葉なくてさぶらふに、「来る山人の便りには訪れむとにや。青葛こそうれしくもなけれ」とばかり御口ずさみつつ、女院の御方へなりぬるにや、立たせおはしましぬるは、いかでか御恨めしくも思ひまゐらせざらむ。

いかばかりおぼしめすことなりとも、「隔てあらじ」とこそ、あまたの年々契りたまひしに、などしもかかるらむと思へば、時の間に世になき身にもなりなばやと、心一つに思ふかひなくて、車^A待ちつけたれば、これよりいづ方へも行き隠れなばやと思へども、ことがらもゆかしくて、二条町の兵部卿の宿所へ行きぬ。

自ら対面して、「いつとなき老いの病と思ふ。このほどになりては、ことにわづらはしく頼みなければ、御身のやう、故大納言もなければ、心苦しく、善勝寺ほどの者だに亡くなりて、さらでも心苦しきに、東二条院よりかく仰せられたるを、しひてさぶらはむもはばかりありぬべきなり」とて、文を取り出でたまひたるを見れば、「院の御方奉公して、この御方をばなきがしろにふるまふが、本意なくおぼしめさるるに、すみやかにそれに呼び出だして置け。故典侍大もなければ、そこに計らふべき人なれば」など、御自らさまざまに書かせたまひたる文なり。

「まことに、この上をしひてさぶらふべきにしあらず」など、なかなか出でて後は、思ひ慰むよしはすれども、まさに長き夜の寝覚めは、千声万声の砧の音も、わが手枕に言問ふかと悲しく、雲居を渡る雁の涙も、物思ふ宿の萩の上葉を尋ねけるかと誤たれ、明かし暮して年の末にもなれば、送り迎ふる営みも何のいさみにすべきにしあらねば、年頃の宿願にて、祇園の社に千日籠るべきにてあるを、よろづに障り多くて籠らざりつるを、思ひ立ちて、十一月の二日、初めの卯の日にて八幡宮御神楽なるにまづ参りたるに、「神に心を」と詠みける人も思ひ出でられて、⁴いつもただ神に頼みを木綿櫛かくるかひなき身をぞ恨むる

(注) 女院……東二条院。 兵部卿……作者の祖父。 故大納言……作者の父。 善勝寺……作者の叔父。
故典侍大……作者の母。

問十八 二重傍線部X「せ」と文法的に同じものを、傍線部イ、二の中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

問十九 傍線部a、cは、誰への敬意を示すものか。それぞれ次のイ、への中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。
なお、同じものをくりかえして使ってもよい。

- イ 後深草院
- ロ 公卿
- ハ 東二条院
- ニ 兵部卿
- ホ 故典侍大
- ヘ 作者

問二十 傍線部1「かかる」が指す内容として最も適切なものを、次のイ～ホの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

- イ 後深草院の寵愛が得られると信じ、作者が中年まで宮中で仕えてきたこと。
- ロ 後深草院ほどの高貴な男性のもとで、作者が長年寵愛を受け続けたこと。
- ハ 後深草院に対していつしか恨みの気持ちが生じ、作者の愛情が失せたこと。
- ニ 後深草院の態度が冷淡になり、作者が御所を退かざるをえなくなったこと。
- ホ 後深草院が作者との関係を突然断ち切り、出家を志すようになったこと。

問二十一 空欄 A に入る最も適切な語を、次のイ～ホの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

- イ して
- ロ など
- ハ にて
- ニこそ
- ホさへ

問二十二 傍線部2「それ」の指す内容として最も適切なものを、次のイ～ホの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

- イ 御所
- ロ 兵部卿のところ
- ハ 故大納言のところ
- ニ 故典侍大のところ
- ホ 祇園社

問二十三 傍線部4の和歌についての説明として最も適切なものを、次のイ～ホの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

- イ 本歌取りの技法を用いつつも、本来の古歌にはみられない愛情表現を詠み込んでいる。
- ロ 通常であれば用いるべき枕詞をあえて用いず、神に祈る作者の心をより際立たせている。
- ハ 「かくる」の縁語として、神事に使用するという「木綿襦」の語を効果的に用いている。
- ニ 比喩表現として「木綿襦」の語を序詞に織り込みつつ、作者の出自をも暗示している。
- ホ 係結び以外には複雑な技法は一切用いておらず、神仏に捧げる和歌の典型となっている。

問二十四 次のイ～ホの中から本文の内容に合うものを二つ選び、その解答欄にマークせよ。

- イ 東二条院のお言葉を考えるならば、無理に後深草院のもとに留まるべきではないというのは、兵部卿と作者に一致した思いであった。
- ロ 退出後は後深草院と二度と会えなくなることがわかっていた作者は、女房たちが反対したにもかかわらず後深草院との面会を強く求めた。
- ハ 御所を退出した作者は、かつてある人が千日籠りを終えて「神に心を」の和歌を詠んだ場を自分の目で確かめようと祇園社を訪れた。
- ニ 作者は御所を退出することになってからというもの、故父君や故母君の後世を弔う法事を行うこともままならなくなってしまった。
- ホ 後深草院は作者の着ていた青葛の服装を見て、青葛を繰ってやって来るといふ山人のようにまた来るのならうれしくもないと言った。

問二十五 傍線部3は、次の白居易の詩を踏まえている。この漢詩を読んで、あとの(1)～(4)の問いに答えよ(設問の都合上、返り点・送り仮名を省いた箇所がある)。

誰^{たが}家^ノ思^シ婦^ノ秋^ノ擣^{ウツ}帛^{きぬ}

月^{ツキ}苦^{シク}風^{カゼ}淒^{しみ}砧^{いし}杵^{しよ} **B**

C月^{ツキ} **D**月^{ツキ}正^{ただ}長^{なが}夜^よ

千^チ声^セ万^{マン}声^セ無^ナ了^{ハル}時^{トキ}

⁵ 応^{オウ}到^{トウ}天^{テン}明^{メイ}頭^{トウ}尽^{ジン}白^{ハク}

⁶ 一^{イチ}声^セ添^{ソフ}得^{トク}一^{イチ}茎^{キョウ}糸^シ

(白居易「聞夜砧」)

(1) 空欄 **B** に入る最も相応しい漢字を、次のイ～ホの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ 迫 ロ 微 ハ 美 ニ 切 ホ 悲

(2) 空欄 **C** と **D** に入る漢字の組み合わせとして最も適切なものを、次のイ～ホの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ 五と十 ロ 三と九 ハ 八と九 ニ 九と十 ホ 十と百

(3) 傍線部5の返り点の付け方として最も適切なものを、次のイ～ホの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ 応^ニ到^レ天^ニ明^ニ頭^ニ尽^レ白

ロ 応^ニ到^レ天^ニ明^ニ頭^ニ尽^レ白

ハ 応^下到^下天^下明^下頭^下尽^下白

ニ 応^下到^下天^下明^下頭^下尽^下白

ホ 応^ニ到^レ天^ニ明^ニ頭^ニ尽^レ白

(4) 傍線部6の意味として最も適切なものを、次のイ～ホの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ 砧を打つ時のかけ声が、冬着の糸の一本一本にまで浸みいる。

ロ 砧を打つ音が響くたびに、髪の毛に一本ずつ白髪が増える。

ハ 砧を打つ音が、秋の草を一本一本、白糸のように細く長く枯れさせる。

ニ 砧を打つ時のかけ声は、一本の糸のように細く長くいつまでも続く。

ホ 砧を打つ音が増えることに、冬着の布糸は少しずつ柔らかさを加える。

[以下 余 白]